

# ホワイト・ドッグ

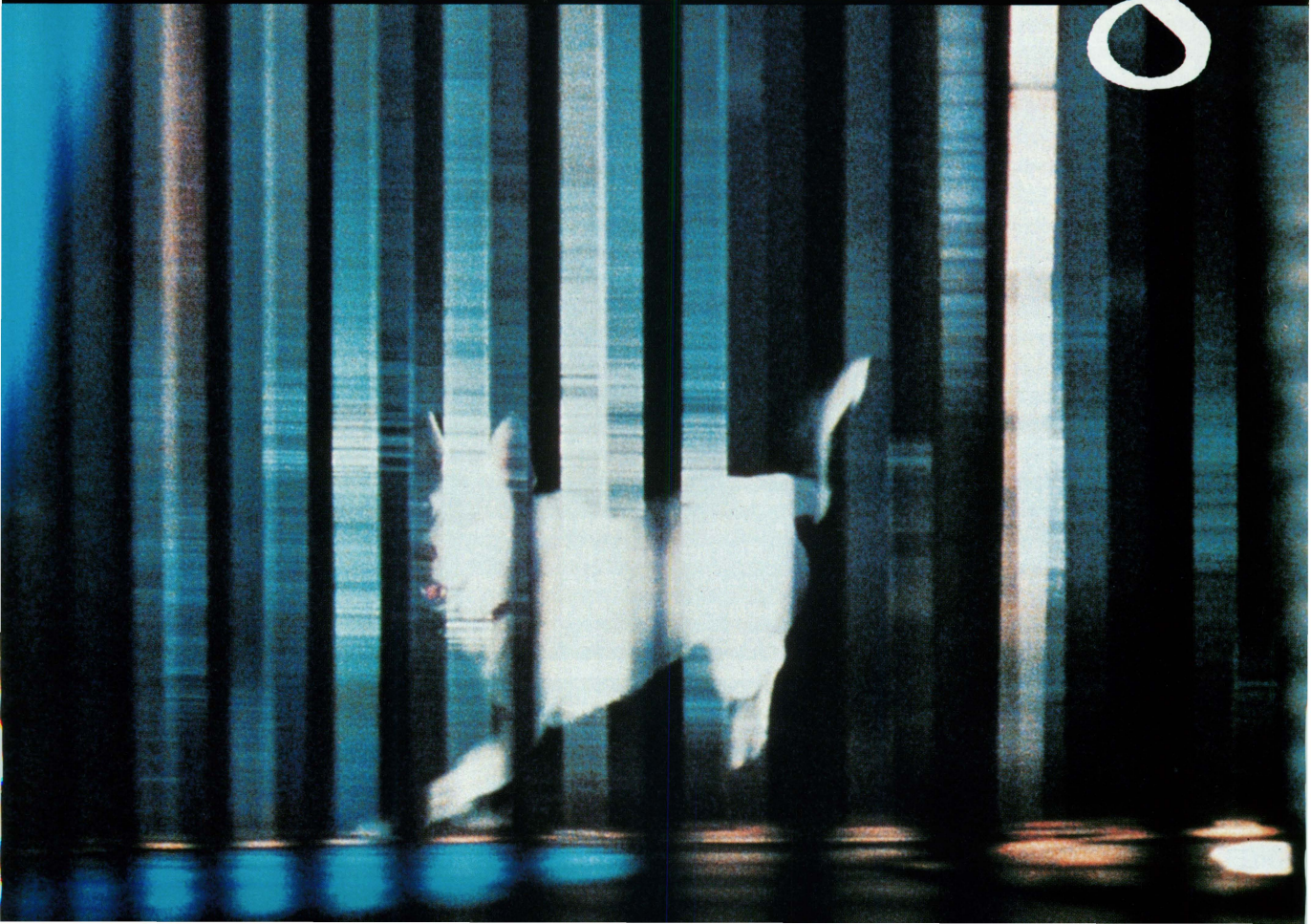
監督—サミュエル・フラー— 原作—ロマン・ガリ— 出演—クリスティ・マクニコル／ポール・ウィンフィールド／パール・アイヴス

1982年 アメリカ カラー 1時間29分 配給—ユーロスペース



黒い肌に牙をむく攻撃犬ホワイト・ドッグ! これは人種問題をめぐる過激な寓話だ。

# White Dog





# ホワイト・ドッグ *White Dog*

1982年 アメリカ カラー 35ミリ スタンダード(1:1.33) 1時間29分  
配給=ユーロスペース

監督=サミュエル・フラー 脚本=サミュエル・フラー/カーティス・ハンソン 原作=ロマン・ガリ 撮影=ブルース・サーティース 音楽=エンニオ・モリコーネ  
出演=クリスティ・マクニコル(ジュリー)/ポール・ウィンフィールド(キーズ)/ポール・アイヴス(カラザース)/ジェイムソン・パーカー(ジュリーの恋人)

## か い せ つ

### サミュエル・フラーの問題作

●「父の恋人」では主演を演じ、「ストリート・オブ・ノー・リターン」、「テンジャーヒート」地獄の最前線」といった近作が相次いで日本公開され、それに合わせて彼の映画祭が催され、本人まで35年ぶりの来日を果たすといったように、まさに今年はサミュエル・フラーの年だ。そして、彼の82年の作品がこの「ホワイト・ドッグ」である。

●舞台はビバリー・ヒルズ。物語は女優の卵ジュリーが白い犬を車ではねてしまう所から始まる。ケガも治り、ジュリーと犬は親友になる。だが、この犬は黒人だけを殺すように人種差別主義者に調教された恐るべき「ホワイト・ドッグ」だったのだ。黒人調教師は差別主義者の馬鹿げた行為を根絶させるために、犬の再調教に挑む。フラーはクローズ・アップとスローモーションを効果的に使うことによって、サスペンスに満ちた画面作りで成功し、観客をスクリーンに釘付けにする。原作は70年に書かれたロマン・ガリの「白い犬」。原作は、ガリの妻であり女優のジーン・セバーグが実名で登場する私小説形式をとったもので、ワッツの暴動、キング牧師の暗殺そしてバリの五月革命など当時を彩るさまざまな事件が描かれている。だが、フラーは原作にあったさまざまな事件を切捨て、黒人を襲う「ホワイト・ドッグ」のみに焦点を絞りこんでいる。

### 人種問題をめぐる過激な寓話、そしてサスペンスの妙!

●「ホワイト・ドッグ」はフラー作品の中でも、きわだって異彩を放つ作品であるといえる。まず人種差別のテーマ。このテーマはフラー作品の中で、常に物語上の重要な背景として描かれてきたが、この問題を正面に据えて徹底的に追求したのがこの「ホワイト・ドッグ」なのである。普段は非常におとなしく賢そうな犬が、黒人を目にした途端、鼻面に皺をよせ牙をむいて襲いかかる。その突然の変貌ぶりに観客は信じていた者に裏切られたショックと、その「獣」の姿に恐怖を覚える戦慄する。このジキル博士からハイド氏への変貌は犬が無垢であるがゆえに一層悲痛なものになる。憎むべきは犬ではなく、犬に歪んだ精神を植えつけた人種差別主義者なのだ。だが、フラーはこの犯人をほんの一瞬しか登場させない。良識的な反人

種差別映画であれば、観客の怒りをぶつける相手である犯人を念入りに描いたであろうが、フラーはセンチメンタルに流れず、犬が黒人を襲撃するシーン、そして黒人調教師と犬との調教風景を淡々と見せるだけだ。このハードボイルドな姿勢が現実の残酷さをいやがおうにも引き立たせる。フラーは無垢な動物を使うことによって、この作品を見事に人種問題をめぐる過激な寓話にまで結晶させている。そして、その過激さゆえに現在もお製作国アメリカで「ホワイト・ドッグ」は上映禁止となっている。

●また、サスペンスの技量の冴えが随所に見られ、その点でも他のフラー作品とは一味違うものに仕上がっている。たとえば、檻から脱走した犬が街を徘徊しているシーンなどは圧巻だ。画面手前にゴミを漁る犬。すると、画面奥に黒人の少年が現れる。建物の陰になり、犬は少年に気づかない。犬がもう一歩、通りに踏み出せば少年は襲われてしまう! 犬が「ホワイト・ドッグ」であることを知っている観客は手に汗を握る。犬が動き出したその瞬間、建物から母親が少年を連れ戻す。何事も起こらないのに、サスペンスがスクリーンいっぱいに溢れる。

### フラーを支えるスタッフたち

●ドン・シーゲルやイーストウッドの作品を多く手がけているブルース・サーティースのクールなカメラが白い2本の牙を画面いっぱいに映し出し、「荒野の用心棒」(64)「夕陽のガンマン」(65)そして「ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ」(84)の音楽で世界的に知られるエンニオ・モリコーネの「恐怖のメロディー」がサスペンスを盛り上げる。

●主人公ジュリーを演じたクリスティ・マクニコルは1962年生まれ。日本でも「リトル・ダーリング」(80)で一躍アイドルとなったが、76年からテレビドラマ「ファミリー 愛の肖像」に4年間レギュラー出演し、その後、エミー賞ドラマ・シリーズ助演女優賞に2度も輝いている演技派女優。

●「ホワイト・ドッグ」を再調教するキーズ役には、瞳に不思議な静かさを湛えたポール・ウィンフィールド。UCLAで演劇を専攻した彼は69年の「失われた男」で映画デビューし、72年の「サウンダー」でアカデミー主演男優賞に

ノミネートされた。主な出演作に「ゴードンの戦い」(73)「世界が燃えつきる日」(77)「アリ・ザ・グレートスト」(77)「スター・トレック2」(82)「ターミネーター」(84)などがある。

●そして映画のラストで「ホワイト・ドッグ」に襲われる老調教師カラザースには名優パール・アイヴス。プロドウェイで「熱いタン」屋根の猫、などの舞台に立つ一方、46年に「Smoky」で映画デビュー。エテンの東(54)でジェームス・ティーンに理解をしめず、警官役を演じていたのが印象深い。大いなる西部 ではその巨体を生かした演技で58年度アカデミー助演男優賞を受賞している実力派。

●また、ジュリーに映画出演がダメになってしまったと電話をかけるプロデューサー役で監督自身が、ほんの一瞬画面に登場し、冒頭、犬を連れていく病院の看護婦にフラー夫人クリスタ・ラングが扮し、当時7歳の娘サマンサが人種差別主義者の孫役で愛らしい姿を見せているのも見逃せない。

## も の が た り

●ある夜、女優の卵ジュリー(クリスティ・マクニコル)は白い犬を車で轢いてしまった。幸いケガは治り、犬はジュリーの家に居つくようになった。ある時、ジュリーの家に強盗が侵入したが、犬は強盗に飛びかかりジュリーを守る。いつしか犬とジュリーは親友になっていった。しかし、ある日突然姿を消した犬が数日後、血まみれで帰ってきた。また、ジュリーの仕事場で、それまでおとなしかった犬が突如、ジュリーの共演者に襲いかかった。ジュリーは犬の突然の変わりように愕然とする。犬は調教された攻撃犬だったのだ。ジュリーは犬を正常に戻そうと動物の調教師を訪れる。

●しかし、ここでも犬は使用人に襲いかかり、さらに駆けつけた調教師キーズ(ポール・ウィンフィールド)にも牙をむく。このとき、ついに犬の正体が判る。犬が襲ったのはすべて黒人ばかり。犬は黒人だけを襲うように人種差別主義者に調教された「ホワイト・ドッグ」だったのだ。

●「ホワイト・ドッグ」の矯正に成功した例はない。しかし、キーズは差別主義者の馬鹿げた行為を根絶させるため、犬の再調教に挑むのだった。

## 11月上旬より独占公開!

特別鑑賞券1300円絶賛発売中(当日一般1600円/学生1300円/シニア1000円)

当劇場窓口および都内各プレイガイド、チケットぴあ、チケットセゾンにてお求めください。

ユーロスペース TEL.461-0211 渋谷駅東急プラザ口下車2分 東急観光うしろ

●上映時間 [先着入場・入替制]

月→金	1:15	3:10	5:05	7:00
土日祝	12:15	2:10	4:05	6:00